〔書　評〕

影山太郎著

# 『文法と語形成』

斎　藤　倫　明

## Ⅰ．はじめに

従来、語構成論という言語研究の分野は、どちらかと言えば語彙論に属すると一般に考えられてきたように思う。そのことは、たとえば、「国語学概説」や「日本語学概説」と銘打った本のページをめくってみれば、語構成に関する事項は語彙(論)を説明した章の中で取り扱われていることが多い、ということによく表われていると言えよう。もちろん、そうは言うものの、語形成論・語構造論といった、今となっては古典的とさえ言える形に語構成論を分類してみた場合、後者において文法論との親近性が強く表われるということは、『国語学大辞典』においても指摘されているところであるし、また、森岡健二、宮地裕らによってなされた、語構成論の研究史を考える場合に無視することのできない一連の研究も、考えてみれば、語構成論を語彙論よりはむしろ文法論の中に位置付けて考えていこうとする立場に立ったものであった。

影山太郎氏（以下、著者と呼ぶ）の手になる本書も、題名が示すように語形成を文法との関わりにおいて捉えかつ考察していこうとするものである。そのことは、「まえがき」に記されている本書の語形成論の規定、「本書では、語の形態だけに留まらず、形態論と文法諸部門(統語論、音韻論、意味論、語用論)との係わり合いをも含めた広い視野から語の諸特徴を総合的に研究することを語形成論(word formation)と呼ぶことにする。」からもよく窺えるところである。しかし、それだけではまだ本書の内容を十分に伝えたことにはならない。というのは、いわば本書の眼目は、「日本語特有の語形成現象を詳細に観察・分析することによって一般言語理論にも有効な理論的提案を示すこと」(322ページ)という明確な問題意識の下に、統語的語形成の存在を立証すること、およびその点を反映した理論的文法モデルを提案すること、といった具体的な目的を達成しようとする姿勢にあると見られるからである。従って、本書は、従来の語構造論や森岡、宮地といった論者達の論とは比較にならないほど文法論との関わりが強く、一見すると純粋に文法論の著作のような感さえ受ける。そういう意味では、どちらかと言えば語彙論的な色彩が強かったこれまでの語構成論の研究史において、本書はまさに画期的な位置を占める著作であると言えよう。また、本書の基本的に拠って立つ文法論が生成文法(GB理論)であるため、本書は、一面ではそういった方面における語形成論の日本語を対象とした入門書という性格も有しており（もちろん、本書はその主張の一つである「モジュール形態論」の考え方を初め、GB理論に全面的に寄り掛かっているわけではない)、筆者（以下、本稿の筆者斎藤を指す）はこの点も本書の一つの特長とし

て挙げておきたい。いずれにしても、本書のような語形成論の登場を、筆者は心から歓迎したいと思う。

## II. 本書の構成、および内容のあらまし

本書の構成は以下のとおりである（全6章構成）。

第1章　語形成の基礎概念　　第4章　N-V型複合語
第2章　非対格性と動詞分類　　第5章　「VNする」構文
第3章　V-V型複合動詞　　第6章　モジュール形態論

この中、第1章は本書の序論に当たり、第2章以下の「議論の背景となる基礎概念」（「まえがき」）が提示、解説されている。具体的には、統語論と形態論との関係、語の定義、語形成の単位とその間の関係、日本語の品詞といった事柄が取り上げられているが、この中では、従来見られない品詞として、「動名詞（verbal noun）」（「『する』を伴って動詞化する表現」[26ぺ] ex. 散歩、研究、立ち読み、買い物、テスト）という概念が提出されているのが重要である。

第2章では、動詞が他動詞・非能格自動詞（ex. 働く、さわぐ、起きる）・非対格自動詞（ex. ころぶ、生じる、浮かぶ）に3分類されるが、自動詞のこの下位分類の基準は、意味的に見れば「行為の意図性」の有無が一つの目安であり、「意図的行為を表す自動詞が非能格」で「非意図的事象を表す自動詞が非対格」（以上42ぺ）である。また、この相違は動詞の項構造にも反映され、それが統語構造（D構造）に投射されることになるのだが、このように、「非対格性が単に意味の問題ではなく統語構造に反映されるという仮説を非対格性の仮説」（47ぺ）と呼ぶ。第3章は、この仮説が日本語においても成立することを論じたものである。なお、著者によれば、「非対格性の立証は、統語的語形成の確立と並んで、本書の根幹を形成する」（「まえがき」）とのことである。

それに続く第3～5章が「本書の実質的な中心」（「まえがき」）をなすが、いずれの章でも、日本語においては語彙部門ばかりでなく統語部門でも語形成が行われることを具体的に立証するのが目的となる。具体的には、第3章ではV-V型複合動詞を対象として、それを幾つかの統語的基準によって「語彙的複合動詞」（ex. 飛び上がる、押し開く、泣き叫ぶ）と「統語的複合動詞」（ex. 払い終える、しゃべり続ける、食べすぎる）とに二分し、両者の様々な相違点は、前者が語彙部門で形成されるのに対して後者は統語部門のサイクル内で形成されるという点に求められるとする。また、第4章ではN-V複合語（後項は「動詞ないし動詞に準じるもの」[178ぺ]である）を対象として、語彙部門で形成される語彙的なN-V複合語（ex. 山登り、家庭訪問、旅立つ）と「統語部門の最終段階であるS構造」（210ぺ）で形成される「S構造複合語」（S-structure compounds）（ex. ㋐［返信用切手：同封］の上、㋑［北京：滞在］中、㋒［新空港：建設］、㋓［成田空港：到着］の［　］内。：は「特有の音韻境界」[211ぺ] すなわち、「前項・後項の各々が独自のアクセントを担い、両者の間に若干のポーズが感じられる」[226ぺ] ことを示す）とに二分し、更に後者を、文構造から派生するもの（上例㋐㋑）と「の」名詞句構造から形成されるもの（上例㋒㋓）とに分けている。最後に第5章は、「雑談する、審査

する」といった漢語サ変動詞を対象とし、それらが「雑談をする、審査をする」といった「迂言的構文から統語的な編入によって派生される」ということをまず明らかにした上で(この「VN 編入」が起こるのは第6章[§6.4]に至ってS構造段階であるとされる。従って、5.2.2.の標題は疑問である)、特に「迂言的構文に焦点を当て、両者の統語的派生関係と意味的・文法的特徴を解明」(以上255ぺ)しようとしたものである。なお、サ変動詞に関しては、語彙部門で形成されるのは「愛する」等の漢字一字サ変動詞であるのだが、これらについては本章では特に触れられていない。

本書の最終章第6章は、「統語論と形態論の接点について考察を加え」た上で、第3～5章を通して明らかにされた「統語的な語形成の存在を文法モデルの中に活かす方法」(以上322ぺ)について探求することを目的とするが、著者が最終的に到達したのは「モジュール形態論」という考え方である。これは、「語彙部門と統語部門の両方で語形成が適用することを認めながらも、両部門における語形成をグローバルに規制する独立の形態部門を想定する」(「まえがき」)という考え方で、これによると、たとえば語の規定などについても、「『語』というものをグローバルに規定する一般的形態制約として独立させること」(356ぺ)が必要となるのだが、「正確にどのような理論が形態論モジュールに所属するのかは今後の研究を待たねばならない」(357ぺ)という。なお、こういった語形成モデルは、著者によれば「結果的に、最近の生成文法に見られるモジュール的な文法観に呼応するもの」(375ぺ)であるとのことである。

以上に述べた本書の内容を簡単に図式化すれば以下のとおりである。

〈本書の目的〉…「日本語特有の語形成現象を～理論的提案を示すこと」(322ぺ)

a.非対格性の立証(第2章)
　　↓ 道具立て②
b.統語的語形成の確立［記述の中心］(第3～5章) ⟶ 理論的な文法モデルの提案(第6章)
　　⟹モジュール形態論

道具立て①
- 新しい品詞の設定［動名詞］(第1章)
- 項構造と語彙概念構造の区別
- 単純事象名詞と複雑事象名詞の区別

## III.　本書をどう読むか

筆者も基本的には語構成論を文法論の中に位置づけて考えてみたいと思っているが、今のところその具体的な見取り図ができているわけではない。ただ、それが最終的にどのようなものに落ち着こうとも、本書とは趣を異にするものになるであろうことは容易に想像がつく。というのは、まず何よりも筆者の考える文法論とは本書のような生成文法(GB理

論)ではなく、むしろ国語学の伝統的な文法研究の流れに沿ったものだからである。従って、筆者は先に述べたような意味で、著者の仕事に最大限の敬意は表するものの、本書でなされている主張を全面的に受け入れるというわけにはいかない。そして、そういった状況を考えてみた場合、筆者と本書との関わりの在り方として最も生産的なのは、結局、筆者の立場からは本書をどう読んだらよいのか、あるいは、筆者が本書から学べることは一体何か、といった問題意識をもって本書に接するということではないだろうか。そうすることが、著者の言う(「まえがき」)「(本書で)指摘する言語事実」を「思考の材料(food for thought)」とする一番の近道であると筆者は信じる。従って、以下、そういった観点に立って本書を読んだ結果筆者が感じたことを幾つか述べることとしたい。

ただ、その前に、筆者の語構成論そのものに対する基本的な考え方について簡単に触れておきたいが、今重要なのは次の2点(①は自己の語構成論についてであり、②は現在の語構成の研究一般についてである)である。①筆者は、語構成と意味との関わり、より具体的には、語構成要素の意味と語全体の意味との関わりを語構造を通して微妙な点に至るまで明らかにすること、が重要であると考えているということ、②筆者は、語構成の研究全般が特定の立場に立つことによって限定されるというようなことがなく、むしろ分析の視点・手法・対象に関して今よりももっと多彩になってほしいと思っているということ。

さて、まず、立場が異なるにも関わらず学べることということになると、何と言っても重要なのは、Ⓐ従来指摘されることのなかった新しい言語事象の指摘か、Ⓑ従来から言われている事象の新しい意味づけ、といった事柄であろう。たとえば、前者に関しては、形態論の単位として第6章で新たに提唱された「語+」という単位(「通常の語よりは大きいがしかし句ではない単位」341ページ)や、著者が「これまでの日本語学研究においては全く気付かれなかった。」(209ページ)と述べている「S構造複合語」の存在などが挙げられよう。これらは、いずれも従来の語構成論の分析対象を拡大したという意味で重要である。もちろん、この他にも、たとえば「他動性調和の原則」(117ページ)といった非常に興味深い現象も指摘されているのであるが、この辺になると、単に「新しい言語事象」というよりは、ある程度著者の理論的な主張(ここでは、日本語においても「非対格性の仮説」が成立するという主張)を納得した上でないと受け入れられない「言語事象」のように思われる。もちろん、上の場合との差は微妙ではあるが。従って、上述の「S構造複合語」の存在というのも、それが著者の主張するようにS構造で形成されるということよりも、著者がそう名づけた複合語がまさに存在するという点に筆者は重きを置いて考えたいわけである。

次にⒷについてであるが、例としては、「S構造複合(語)」の適用範囲の拡張として、名詞化接尾辞「さ」の「〜さに」(ex.「酒代が欲しさに」)といった用法(245ページ〜247ページ)と2種類の「さ」(「あの先生の恐さ」、「幽霊(が)恐さに」)の区別の問題(367ページ〜368ページ)、および「道行く人が」といった関係節構文の問題(248ページ)も著者によれば扱えるとされている点が挙げられるであろう。ただし、2種類の「さ」の区別については疑問がないわけではない。というのは、たとえば「懐かしい」という形容詞の場合、「古里の懐かしさ」という形でも「古里」に対する感情を表せるのではないか、と筆者には思われるからである(もちろん、「古里(が)懐

かしさのあまり」という形も言えるが)。

ところで、以上述べたような事柄がなぜ本書で取り上げられたのかを改めて考えてみると、当然のことながら、これらを文法論的に位置付けることによって解釈しようという著者の意図がその背景にあるからである。しかしながら、著者のそういった意図の存在理由を更に問うならば、それは、先に示したように、本書の大きな目的の一つに、統語的な語形成の存在を立証するということがあるからに他ならない。けれども一方、本書をよく読むと、そういった文法論上の位置づけからする解釈とはまた別に、Ⓒそういった事柄に対する、どちらかと言えば語彙・意味論的な説明が加えられていることがままあることに気付く。そして、実は筆者にとってはそういった説明の方がおもしろかったのである。例を一つ挙げるならば、たとえば、第4章の最後において(251ページ～253ページ)、「S構造複合で編入される名詞は述語に統率された内項だけに限られ、内項を文中に残したまま副詞要素を編入することは許されない」のに対して、「語彙的な複合語においては、名詞要素は内項の場合が多いが、それに劣らず副詞的要素である場合も多い。」という点について、「なぜ語彙的複合語は副詞類を好むのだろうか。」という問題提起をし、それに対して、目的語が文中で主語とともに担っている「登場人物の指示対象を述べるという重要な役目」について触れた上で、「要するに、目的語に指示機能を与え、有機的な文を生成するために，語彙的複合語は目的語を含むことを避け、むしろ目的語は外へ出そうとする」からである、と説明している箇所などがそれに当たろう。

しかしながら、以上に述べたことは、これを逆に言うと次のようになる。

一つには、Ⓓ文法論的な位置づけの上からはさほど重要ではないものの語彙・意味論的な観点から見ると興味深そうな問題については、本書ではその存在の指摘だけにとどまりあまり詳しい考察が行なわれないのが普通であるが、筆者にはその点が非常に残念に思われた、ということである。たとえば、本書では語彙部門で作られる語には多かれ少なかれ「名付け機能」、あるいは「意味の慣習化」が見られると述べているが(ex. 78ページ、180ページ、200ページ)、本書で言われているように、それには「様々な程度」「程度の差」が見られると思われる。しかし、その程度性の実質については本書では具体的には何も明らかにされていない。もちろん、そういった問題が本書の直接的な興味の対象でないことは重々承知しているのだが、筆者としては、語構成と比喩との関わりの問題を含むであろうそういった点にこそむしろ興味を覚える。なお、この「名付け機能」との関わりで筆者が一つ気になるのは、この概念が規則の例外の説明として安易に使われては困るということなのだが、その点さすがに本書では注意深い使われ方がされているようである。ただ、それでも、28ページ(33c)の例に対する説明の仕方には、少し引っかかるものを筆者は感じる。

さて、逆に言えることのもう一つは、Ⓔ文法論的な位置付けの上からは重要であっても語彙・意味論的にはさほど重要でない問題についても、本書では比較的詳しく扱っているように筆者には思われたが、その中にはさほど筆者には興味の持てなかったものもあった、ということである。たとえば、第3章(3.3.)において、「語彙的複合動詞に見られた項構造の合成という操作が統語的な複合動詞にも関与するのかどうか」(139ページ)という問題設定

をし、それに対しては、「統語的な複合動詞ではＶ１、Ｖ２が各々のθ役割を持ち、語彙的複合動詞で見たような項構造の合成は起こらない」(同上) と結論づけているが、その過程で、著者は他動詞型の補文構造をとるV-V複合動詞全体を直接受身になるかどうかという基準で以て大きく二分し、その違いはＶ２が補文内の目的語をθ標示するかどうかにかかっている、と述べている。これはこれでよく分かるのであるが、著者は更に「この意味の違いを統語構造に反映させることはできないだろうか。」(159ページ) と述べ、補文構造にVPとV'の2種類を区別するのであるが、筆者には正直言ってその辺の議論についてはあまり興味が湧かない。ただし、これは筆者のGB理論への認識の甘さから来る問題なのかもしれない。

## Ⅳ. 第1章における「基礎概念」をめぐる疑問点

既に述べたように、本書の第1章は全体の序章にあたるが、そこで提出されている「基礎概念」に関する個別的な疑問点を、二つほど簡単に記しておきたい。

最初は語の規定をめぐってである。著者によれば、語を一義的に規定するのは困難なので、「誰しもが語と認める」ものの有する諸特徴を列挙するのに留めるという。そして、そうすることによって初めて、それらの「特徴の総てを備えた」「典型的な語」(=「語彙部門で生成され辞書に登録されている語」) と「それらの特徴の幾つかを欠くこともある」「典型的でない語」(=「語彙部門ではなく統語部門で形成される語」) (以上7ページ) とが区別されることになるとするが、この主張は、統語部門における語形成の確立を目指そうとする本書にとっては非常に重要なものであると言えよう。

ところで、「典型的な語」「典型的でない語」という表現に接すると、我々はすぐにプロトタイプ論を思い浮かべるが、本書のどこにもそういった用語は見えないし、著者の主張もそれとは若干異なるようである。というのは、著者によれば、語彙部門で形成される「典型的な語」に見られる諸特徴の中、統語部門で形成される語にも同様に見られる「二叉枝分かれ構造や格助詞・時制の排除といった、語形態に関する特徴」(12ページ) こそが「語の認定において真に重要な」(13ページ) 特質であり、それを共有するという意味ではどちらも語であることにおいて違いはない、という点が強調されているからである。しかし、もしプロトタイプ論の立場に立つならば、これら二種の存在の間には、まさに典型的から非典型的へといった語としての在り方における程度差が存在するということになるのではないだろうか。この点は、これら二種の存在を本当に同じような意味で語と呼んでいいのだろうか、という問題と深く関わってくるのであり、本書にとっては重要な問題であると思われるのであるが、先に述べたように、プロトタイプ論に対する言及が本書には一切見られないのはどういうわけであろうか。

二つめは、「動名詞」をめぐってである。これについては、既に述べたように第1章で提案され、第5章で詳細に分析されているわけであるが、ここでは、それらの箇所で論じられている点については触れない。それよりも今ここで問題にしたいのは、特にこの品詞との関わりで言及されている「語彙の阻止 (lexical blocking)」という「語形成の一般原理」(29

ぺ)についてである。すなわち、まず著者によれば、たとえば、「受け取り方法」、「あら探し」の下線部は、確かにそのままでは「*受け取りスル」「*探しスル」という形にならずVNの定義に反するように見えるが、やはりVNであると考えるべきであるとされる。そして、それを保証してくれるのが「語彙の阻止」という考え方だというのである。どういうことかというと、「受け取り」「探し」というVNは、一方に「受け取る」「探す」といった動詞が存在するために、いわばそれに「阻止」されて現実に存在できないだけであり、理論的には充分可能な形であるというわけである(もちろん、それに加えて、前者については「方法」が一般に動詞連用形ではなくVNを要求するということ、後者については「右側主要部の規則」で一貫して主要部を解釈するということ、といった実際的、理論的な要請が背後にあるわけであるが)。(以上29ぺ、182ぺ～183ぺによる)

しかし、VNについては「語彙の阻止」という考え方だけでは律しきれない点がある。すなわち「引っ越す」「引っ越しする」、「盗み見る」「盗み見する」、「垂れ流す」「垂れ流しする」といった、複合動詞と「VNする」とが現実的に併存する例が幾つか存在するという問題である。また、著者の立場からは「動詞＋VN」と分析されるのであろうが、「立ち読み」「放し飼い」等VNしか存在せず複合動詞形の存在しないものについては、そもそもこういった語彙的意味を表現するに当たって、どうして複合動詞形ではなくVNの形式が必要とされたのかという、その成立の根本理由を問う問題が存在するわけであるが、その点については「語彙の阻止」という概念は何も教えてくれない。

## Ⅴ．おわりに

以上、思いつくままに述べてきたが、どちらかと言えば、著者の意図を顧みない無い物ねだり的な要求が多かったことを恥じるばかりである。また、著者の主張や考えを誤解していたり、充分理解していないところも多々あるだろうと思われる。それらは、もちろん基本的には筆者の能力のなさによるものであるが、一面、本書の背景をなすGB理論そのものの有する難しさ、あるいは新しさにも起因するところが幾分かはあるかもしれない。実際、たとえば、「項構造」と「語彙概念構造」とはレベルが異なる(97ぺ、128ぺ)と言われても、筆者には今一つ両者の関係について判然としないところがあるし、「単純事象名詞」と「複雑事象名詞」という用語についても、いかなる意味で一方が「単純」、一方が「複雑」ということなのかよく分からないというように、基本的な部分でGB理論に対する認識不足の面が筆者にはあることを認めざるを得ない。

ともあれ、著者が「まえがき」の中で述べている、「伝統的手法による日本語学」と「生成文法を中心とする形式文法理論」との不幸な乖離を克服し、両者が協力し合うような研究状況を作り出したいという著者の思いは、本書によって確固たる基盤を与えられたと言って間違いないであろう。

(1993年10月20日発行　ひつじ書房刊　A 5判　395頁　5 000円)

――東北大学助教授――

(平成6年5月25日　受理)